

新刊紹介

ファン・ガブリエル・バスケス著『コスタグアナ秘史』

久野量一訳 水声社、2016年、322頁

井上 真理

本書は『ノストローモ』で「コスタグアナ」と呼ばれた国コロンビアの裏面史を語り直す中で、「書く」ことによる精神的救済を学んでいくある人物の物語である。その人物、亡命コロンビア人ホセ・アルタミラーノの一人称の回想録として、物語が語られてゆく。ホセは、コンラッドが『ノストローモ』を執筆する際に、その情報提供者であったとされる亡命ブルジョア、サンティアゴ・ペレス・トゥリアナの特別な下宿人であり、小説中では、ホセがトゥリアナの代わりに情報を提供したことになっている。この出会いによってホセは、コンラッドに対して愛憎半ばする複雑な感情を抱くようになる。そしてコンラッドの死を待って、彼の「屈折したペン」(150頁)の功罪を問う物語を書き始める。

物語はホセの父親ミゲル・アルタミラーノから始まる。ミゲルは、首都ボゴタの政争により放浪の身となっていたが、パナマの地で再起をかける。そこでは、二つの大洋を結ぶ最短ルートとなる鉄道の建設が、多大な人的犠牲の上に進められていた。進歩と自由を信望するミゲルは鉄道会社の宣伝マンとなり、死傷者数を粉飾するなどして成功をおさめる。1876年のある日、父親をたずねてホセが現れ、アシスタントとしてその仕事を学ぶ(見習い水夫ユゼフが武器密輸のために同地に來たのと同じ頃)。鉄道が完成すると、ミゲルはその「現実を歪める能力」(119頁)を買われ、運河会社の会報特派員になる。鉄道同様、運河の建設は遅々として進まず、黄熱病で多くの現地白人が死んでいたにも拘わらず、ミゲルはフランスの投資家向けに現地の順調ぶりを報じ続ける。しかし、やがてパナマの実態が明るみに出ると会社は倒産、建設は中止に追い込まれ、汚職記者と名指しされたミゲルは失意のうちに生涯を終える。

父親の末路を見て、ホセは建設技師の未亡人と共に、フランス人の引き揚げたゴーストタウンで一人娘エロイサーの子育てに没頭し、政治とは無

縁の生活を試みる（コンラッドと名乗り始めたユゼフがアフリカ行きという再出発をした頃）。しかし、首都ボゴタで再びキリスト教系保守派と野党自由派の内戦が起これると、コロンビア全土は瞬く間に戦火に見舞われる。一方、パナマ運河の利権をめぐり、今度はアメリカが建設資金を出す代わりに運河周辺の管理権を求める条約の締結をコロンビア政府に突きつける。これを保守党政府が拒否したのを受けて、自由派革命軍の根城であるパナマ州では分離独立クーデターが起こる。アメリカ軍と鉄道会社がこれを援護し、形勢を不利と見た政府軍は退却する。こうしてパナマの分離独立が決まる。この内戦でホセは妻を殺され、歴史と政治への復讐を誓う。そして偶然にもクーデターの舞台裏に居合わせ、革命軍と政府軍の裏取引に関わりをもつことになる。しかし、自分がクーデターを通報していたら、祖国は分裂せずに済んだはずだという罪の意識に悩み、逃げるように単身イギリスに渡る。

亡命者となったホセは、イギリスにおける亡命コロンビア人の中心的存在ペレス・トゥリアナ（『ノストローモ』本編に登場する架空の歴史家ドン・ホセ・アベリャノスのモデルとされる人物で、本作には彼が『失政五十年史』ではなく、『ボゴタから太平洋へ』という亡命記を出版した経緯も語られている。「訳者あとがき」に明快な解説あり）の元に身を寄せ、彼を通じてコンラッドを知ることになる。コンラッドはホセの話から、架空の国コスタグアナの銀山を舞台とする小説を書く。それが『ノストローモ』である。連載初回を読んだホセは自分の存在が消去されているとコンラッドに詰め寄る。しかし、コンラッドは小説家としての直観と知見に従って聞いた話を利用したままで、それについて説明する義務はないと言い放つ。やがて時が経ち、コンラッドが世を去ると、ホセはコロンビアの内実と「偉大な小説家」（15頁）の秘密を暴露する回想録を書き始める。それが『コスタグアナ秘史』である。

作者のフアン・ガブリエル・バスケス（Juan Gabriel Vásquez, 1973-）はボゴタ生まれのコロンビア人作家である。法律を学んだあと作家を志し、パリ、ベルギー、バルセロナに移り住んだ。2007年に本作 *Historia secreta de Costaguana* で評判となり、2011年に『物が落ちる音』でアルファグアラ賞を受賞、最新作『廃墟の形』（2015年）では、バスケス自身を思わせ

る語り手を登場させ、コロンビア現代史の汚点とされる二大暗殺事件の真相を追及する。コンラッドのスペイン語圏への紹介者としても、本書や『ノストローモ』の新訳への序文、一般向け伝記の執筆など、ここ 20 年間のコンラッドへの評価（今や『ノストローモ』はラテンアメリカ文学の先駆として読まれているという）の高まりに大いに貢献してきた人物である。

あらずじにも表れているように、コンラッドはコロンビアの「大きな出来事」（40 頁）とはほとんど無関係である。一度だけ、マルセイユから銃を載せた船でコロンに到着し、それをミゲルの関わった鉄道で運び、パナマの革命軍に売ったことがある（と本書では描かれているがこれには諸説ある）が、数日後、その銃がコロンビアに数千の死傷者をもたらしたことも、政治的には全く無駄に終わったことも、コンラッドは知らなかった。しかしながら、本書の約三分の一はコンラッドのエピソードで占められている。この密輸の一件をはじめ、ポーランドでの子供時代（有名なアフリカ地図の逸話や父アポロとの生活）、借金による自殺未遂（これは後に自伝で名誉の決闘に書き換えられた）、アフリカ行きの経緯、そして作家になってからの苦勞（書齋機のボヤ、冒険作家とみなされることへの怒り、共同執筆の行き詰まりによる家族ぐるみの不和、痛風、ジェシーの怪我、ボリスの泣き声）など、その多くは語りの現在である 1924 年時点では知られる事実であるが、ホセはその強い共感力で知ることができると設定されている。事実かどうかは別として、小説として本当らしさの感じられるこれらの描写によって、本書はコンラッドを知らない読者にとっても読み易いものになっている。さらにこれらのエピソードには、語り手に代弁させたバスケスの鋭い心理的洞察も含まれている。特に、コンラッドとドストエフスキーや伯父タデウシュとの関係についての考察は一読の価値ありと思われる。所々に『闇の奥』を思わせるディテールがあるのも興味深い。

その一方で、これらの伝記のエピソードの多くは、コンラッドが明らかに隠蔽したことや、どちらかといえばコンラッドの無責任と自己中心的な行動を暴露するものとなっている。また、冒頭においてすでにコンラッドの文学的な搾取がほのめかされているため、ホセの語りの目的はそのことへの弾劾のようにも見える。実際、コンラッドに人生を搾取されたコロンビア人が、今度はこの帝国主義的な作家を語られる立場に置き、その人生

を語りを利用し、構築しなおしているという意味では、いわゆる植民された側からの書き返しのようにも見える。しかし、読者は読み進めるにつれ、搾取者とされるコンラッドに共感し、作家としての冷徹なふるまいをも許せるようになる。つまり、この回想録は、報復というより、コンラッドという一人の人物を理解するプロセスなのである。語りの終わりには、ホセの関心はコンラッドから、パナマに残してきた娘へと切り換わっている。

これによって、ホセはコンラッドへの執着を一つの経験として乗り越えたことがわかる。ホセは、クーデターで「悪意のこもった沈黙」(273頁)をしたことをコンラッドという権威によって免罪してもらおうと期待していた。その期待が裏切られたことがコンラッドへの執着を生んでいたが、その権威が次第に剥がれ落ちていく中で、ホセは自ら書くことの意義を理解するようになる。すなわち経験を言語化して何らかの枠組みを与えることの意味を理解するのである。最終章は「ホセ・アルタミラーノの告白」と題されているが、同国人のトゥリアナにも語れなかったクーデターの苦い経験を書き、それを「告白」と名付けたことで、ホセはその記憶から距離を置くことができるようになったと考えられる。

このように、本書の重要な問いかけとして、書くことによる経験の歴史化があると思われる。それをホセに教えたのが、ミゲルとコンラッドという二人の「父親」だろう。両者とも理想のためには現実を歪曲することに良心の呵責を感じない、あるいはその呵責を受けとめることができる「屈折したペン」の使い手であり、ホセは彼らの「羨むべき」(119頁)能力に違和感を抱きつつも驚嘆させられる。コンラッドの死、独立105周年に沸くコロンビアからのニュース、そしてミゲルなら「誰かが書かなくても文章を書き著し、来る世代のために大きな出来事を書き残しただろう」(248頁)という思いが、ホセにこの手記を書かせたのだろう。コンラッド(ヨーロッパ) vs. ホセ(非ヨーロッパ)という、二項対立的なこれまでの構図にはおさまらない新しい世代のポストコロニアル小説といえそうである。

(いのうえ まり 東京理科大学 非常勤講師)